

自動車の改造文化 ユーフォリアをもとめて

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター
難波 友晴

この論文は自動車の「改造文化」を調査しているものである。自動車の改造は本来無駄な行為である。改造をしなくとも公道を走行するのに支障はない。しかし、改造は行われる。このことから「改造」は自動車を所有している個人の、何かしらの欲求を満足させるために、既存のパーツを交換、加工することと考えられる。文化とは人間の精神的な生活にかかわるものを指し、本研究は改造文化がどのように人間の精神的な生活にかかわっているかを論述していきたい。

1 章では、本研究で用いたアプローチで自動車をテーマとした先行研究を考察する。この先行研究では危険な運転を行う車文化を形成している若い男性の背景や動機、集団のやりとりなどが描かれている。この先行研究は本研究で行ったインタビューの質問や改造文化の骨組みとして参考にしている。本研究は車文化の一つの部分である改造に注目し、改造文化の存在、改造を行う者に内在化するものを発見することを課題としている。

2 章では改造される物、つまり自動車に焦点を当てている。自動車を運転しているとき、スピードやブレーキ、外見、ブランドなど様々な機能が作用している。このように、自動車を持つ機能は多様性に帯び、多様な機能が関連していることで自動車という「全体」が存在している。このことから人々が自動車に対して何を求めているのかを調査し、自動車を持つ多様な機能を調べた。そして得たデータを KJ 法によって自動車の持つ多種多様な機能をまとめ、自動車の全体を示している。

3 章では改造をする者たちに焦点を当てる。この章では、彼らの改造に関することをインタビューと観察によって論述している。彼らは少年期にミニ四駆と呼ばれるミニチュアで実際に走る自動車ユーフォリアを体験する。本研究のユーフォリアは、麻薬のようなアドレナリンを持ち、他の人から見れば理解しがたい幸福感を意味している。このユーフォリアは麻薬やギャンブルのように身を滅ぼすようなことは少ない。ミニ四駆を体験した彼らは自動車を所有すると公道を走る改造車や友人の改造車に羨望し劣等感を持つ。この劣等感を優越感にするため彼らは改造に没頭して行くのである。そして工具や知識、仲間たちとの評価のやりとり、公道での走行によって達成感や優越感、自己陶醉というユーフォリアを得ている。

4 章はここまで調査してきたことをまとめている。そして本研究結果をもとに、本研究の対象者である改造をする人たちの交通安全対策を自動車と馬の類似性、スポーツのユーフォリアによって考察し、本研究の結としている。